

神戸大学 大学教育研究センター 大学教育研究
第 13 号 (2004年度) 2005年 3月発行 : 59-69

大学教育の改善・開発に向かって

山内 乾史 (神戸大学大学教育研究センター助教授)

大学教育の改善・開発に向かって

山内乾史（神戸大学大学教育研究センター助教授）

I. 「教える」から「育てる」へ：望まれる教員像とは？

望まれる教員像というテーマにふさわしい論稿について書こうと思ったのだが、大学の教員に限っては非常に難しい。『二十四の瞳』の大石先生、あるいは1960年代の夏木陽介や竜雷太、1970年代の村野武範、中村雅俊のような熱血教師、1980年代以降の金八先生などはすべて小中高校の望ましい教師像のモデルの一つである。しかし大学にはモデルらしいモデルはなかった。もちろん、旧制高等学校には名物教師はいたし、また戦前戦後の大学にも名物教師はいた。大学には数々の人間的な出会いと感動のドラマがあったということはいうまでもない。しかし、ここ10余年ほどの間は別として、大学教員としての理想像は『白い巨塔』を見ても理解できるとおり、「研究者の鑑」と呼ばれるような人物であったといえる。

大学が高等教育になる、つまり、教育機関の一つになり、研究から教育へのシフトが続けられている今、改めて望ましい大学教員像を問う意味はあると考えられる。しかし、今後、ただ単なる授業時の講演者としての教育マシーンとしての教員ではなく、大石先生や熱血先生、金八先生とは言わぬまでも、教える人間のヒューマンな部分が相当問われるようになってくるのではないかと考えられる。つまり、単に「教える」ではなく、「育てる」ことへとさらにシフトしていくことになるのではないだろうか。

これに関して、次のようなエピソードを入れておきたい。筆者は近所の某コンビニにしばしば買い物に出かけるのだが、そこに嘉門達夫言うところの、いわゆる「ヤンキーの兄ちゃん」が店員として雇われた。茶髪、そり込み、ピアスと絵に描いたような「ヤンキーの兄ちゃん」である。「こんな人雇って大丈夫かな？」と思っていたところ、案の定、トラブル続出であった。一度大きなクレームが来た後、店長がじっくり再教育をして店頭へ送り出したのだが、またしてもトラブル。そして客への謝罪の場で、あまりにもなじられたのだろう。客の言葉に逆ギレして啖呵を切ってしまった。…もうどうしようもないな…。多くの人がそう思った。「こんな店員はクビにしろ！」という声もかなり聞こえてきた。筆者も、「この人はこういう対人サービス業には向かないのではないのか？やめた方が本人のためではないか？」と思った。ところが、店長は一定の謹慎期間において、また再教育を行い、見事にきちんと対応の出来る店員に仕上げた。多くの客がその変貌ぶりに驚いていた。

筆者が言いたいのは、その再教育の秘訣云々ではない。「教える」と「育てる」との違いについて述べておきたいのだ。「教え」てその結果、生徒が的確に知識や技術を習得しなかったとしたら、それで（低い評価が下されて）終わりになる。「教える」ということにはこういった側面が付きものである。そうではなく「育てる」ということは効率重視の時代にはなかなか受け入れがたいことかもしれないが、大変ねばり強く相手に接して行かねばならない。しかもその結果が報いられるとは限らない。徒労に終わる場合もあろう。効率重視の立場からすると、それは「ムダ」ということになろう。しかし、収益を重視する企業ならばともかく、教育という営みには（こういう意味での）「ムダ」を許容するところがなくてはならないのではないのか。

そして「教える」場合でもそうではあるが、「育てる」場合にはなおさら、学生をよく知ることがまず第一歩として必要であり、学生を知ろうとすること、学生とふれあおうとすることが、学習を含む様々な活動を支援することが、おそらく望ましい教員像の必要条件ではないだろうか。もちろん、学問的に高邁な講義をしていて、学生とは没交渉だけれども深い感銘を与えるというクラシックなスタイルの教員もいる。しかし、これからは教師の学問的水準がどうかということ以上に、学生との関わり方がどうか、ということが問われるようになると考えられる。言い換えれば、大学はただ単なる学問の場であるばかりでなく、人間形成の場に移ってい

くのではないかということである。

学生を「育てる」、そしてそのために学生を「知る」ことは望ましい教員像を考えるためだけでなく、望ましい大学像を考えるためにも必要条件である。そのためには企業がクライアントの調査をするように、大学もIRセンター(Institutional Research Center)のような、企業、受験する可能性のある高校生、学生、卒業生、協定締結校を調査する拠点をもうけて、これら大学教育のクライアントの要望をくみ取り、それを各授業や教育システム作りに反映していく努力が今後より一層必要になると考えられる。一教員が教える大学の学生数は、高校教員の場合よりも多く、学生とのつきあいの密度は薄いというケースが多いのは言うまでもない。そのため個々の教員が徒手空拳で個別的に学生を知ろうと努力するのは、奨励すべきことではあるが、しかしエネルギーの有効利用という観点からは無駄も多いように考えられる。大学にしっかりした拠点を設けてバックアップしていくべきではないかと考えられる。つまり教員に対する教育支援も必要であるということである。

II. 学生の勉強時間は増えている：「学生」から「生徒」へ

近年の学生を見ると、20年前までとは明らかに違う傾向として、自分たちを「生徒」と称しているものが多く、「学生」と「生徒」の違いを理解できない。この傾向は学士課程のみならず、大学院の博士後期課程の院生にも見られる。しかし、これは現実を实によく言い表している。主体的に学問に取り組み研鑽していく「学生」から、学問だけではなく人間形成を含む様々な活動を大学で行う、つまり生活の場としてキャンパスや講義室で時間を過ごす「生徒」へと変化しているのである。

もちろん、すべてではないにせよ、最近の学生の中には、勉強に意欲的な学生が多く見られる。全国的な調査でも私の勤務校の調査でも確実に増加している。神戸大学の『学生生活実態調査』の結果を概観してみよう。図1は、やはり大半の学生は教養か専門かは別として就職のためではなく、学習のために進学したということを示している。「モラトリアム」が増え、「クラブ」が減るという方向に向かっている。この原因としては、ダブルスクール現象が進んだためといわれており、学生が忙しくなってクラブ離れが進んでいるためと一般には解釈されている。ただ、モラトリアムというのは「就職がないからしょうがなく進学」という必ずしもマイナスのイメージではなく、自分が何がやりたいのかまだはつきり分からないから、それを大学生の間に見つけるのだというポジティブな面があると考えられる。現実には、図8を見ても分かる通り、昭和30年前後生まれの世代と比べても進学目的は殆ど変わらないことが特徴的である。

図2で神戸大学選択の原因として「大学の特色」があがっているのは嬉しい限りであるが、「教官・設備」ではないのは些か寂しい。また図3では、所属学部への適性について、「悪くはない」と「よく分からない」で2/3を占めることに注目すべきである。法学部とか文学部とかディシプリン・ベースの学部とは異なり、神戸大学の例で言えば発達科学部とか国際文化学部とか名前だけでは、どのような教育・研究が行われているのか、漠然としたイメージ以上のことはよくわからない学部がある。現実に入學してみても、文系理系にまたがり様々な専門の先生がいるため、何でもできそうでな気がするため、結果として何をやっていいかますます見えにくくなるのである。

図4と図5は1日の勉強時間であり、最近伸びてきている。図6は授業の欠席理由だが、「魅力がない」というのが圧倒的である。「魅力がない」という烙印を押された教員からすれば、もちろん、反論はあるだろう。ただ、こういったタイプの教員はあまり学生の声に耳を貸さないという先生が多く、ずっとすれ違ったままというケースが多いように見受けられる。

図7は授業の満足度であるが、不満足な学生がかなりいることがわかる。しかも図11を見ればここ数年その比率は変わらないことがわかる。つまり、ここ10年程の教育改善の成果を、少なくともこういった数字に

見ることは出来ないということである。

ついで、図9を見ると、授業への出席度が上がっていることがわかる。しかし、図10を見ると、理解度は上がっていない。もちろん、これは大学だけの問題ではなく、高校以下の教育との接続の問題もある。あるいは神戸大学だけの問題ではなく、大学一般の問題でもある。図12を見ると教官との接触も少しばかり改善されているが、大きく変わったわけではない。この接触度と満足度、授業への積極的な参加とは関係があると考えられる。

Ⅲ. さまよえる学生たち：自分探しの場としての大学

他大学の調査を概観した結果と併せてまとめると、次のようになる。どの大学でも、楽勝コースをひた走る学生はいる。しかし前述のように「まじめな」学生も増加しており、分散ないしは二極化しているように見える。まず、授業には非常に熱心に参加する学生が非常に多い。しかも「出席を評価に加えてくれ」ということを要求する。そして他のまじめに授業を聞かない学生の態度を批判する。これらは近年の高校以下での、意欲・関心・態度といったプロセスの評価開始とも関係があるだろう。また他大学の大学院や留学などを考える場合に、成績がよくなってはまずい、いい成績を取らねばまずいというのがあるのだろう。しかし、そういった功利的な判断に基づくばかりではなく、勉強時間が増えていることから見ても、大学は勉強する場である、勉強しようという学生が増えていることは事実である。ただ、しかもエリート段階のように学生が勝手に本を読んで勉強するという時代ではなく、授業を通じて知識や技術を習得しようとする時代に入っているのであり、授業以外の場での学習が少ないのだと考えられる。だからこそ、より一層、授業場面を含めた生活の場としての大学に関する適切なガイダンスが求められるのである。

現在の学生は「総合××」とか「国際××」とかいった、よく言えば総合的・学問横断的な学部、悪く言えば何をやっているのか名前からは分からない寄り合い所帯的な学部属しているものも多い。こういった学部に入ってくる学生の場合、何がやりたいかはっきりしておらず、むしろはっきりしていないからこそ、そういう学部に入っているというケースが多い。「やりたいことがはっきりしないなら」、「目的意識がないなら」大学には来るなというのはアナクロな考え方である。むしろ、大学に行かない方が、「何故あえていかないのか」をはっきりさせねばならない時代なのである。そうだとすれば、大学の在り方、大学教員の在り方も自ずと変わるわけで、「何をやりたいかはっきりしている学生」に高適な講義をするのではなく、「何をやりたいのか分からない」学生に自分探しの場と手がかりを提供するということにならざるを得ない。繰り返し述べる通り、それは授業に限らず、課外活動やインターンシップなども含まれよう。その意味で学生と教員の接点、媒介となるものは学問、授業だけではなく、広く学生の生活全般に及ぶことにもなる。したがって学問的に偉いというだけでは望ましい教員像とはならないのである。あるいは授業についていけない学生でも「勉強しなさい」の一言で切り捨てるのではなく、応分のケアをすることが求められる。

さて、その学生との接し方において、かつてであれば大学は単なる教育機関ではなく、大学教員は単なる教員ではないのだから、大学で展開される教育はただ単なる教育ではないという理屈が成り立った。しかし、現在ではどうなのか？大きな問題は、学生達の学習行動が幅を広げていることである。つまり短期・長期の留学やダブル・スクール、語学学校によって、大学在学中に他の学習経験を持つことになるわけである。そういった場で展開される教育の在り方、教師の像と大学の授業や教員とが比較されることになるわけである。「いや、条件が違うのだ」「目的が違うのだ」ということは、なかなか言い訳にはなりにくい。

現在の学生は、現在の教員自身が学生であった頃と比べて、消費者意識が強い。学生アンケートでも、自分を消費者、客と考えているものが非常に多いことが分かる。喜多村和之教授がかつて『学生消費者の時代』という著書を著したが、まさに学生の意識としては教育サービスを対価を払って購入しているという意識が強く、

遅刻するとか著しい手抜きの授業をすることは詐欺行為だということになってしまうのである。

IV. 学生は「お客様」か・・・授業評価の在り方

そこで授業評価の話になる。現在、大学が学生の声を生システムティックにくみ上げるメカニズムとしては、学生生活実態調査と授業評価があげられる。ここから何がくみ上げられるのか、そしてそれをいかに受け止めるべきなのかについて論じたい。授業評価の信頼性、有効性についてはなお、議論が見られる。宇佐美寛『大学の授業』や佐藤和夫『アメリカの大学と学生』はその最も先鋭的なものである。この両著を通じて感じるのは、もともと大学では学生の好みだけを重視したカリキュラム作りなどが行われているはずはなく、学生からは望まれなくとも彼らの将来を見越して必要と思われる科目を教える必要と責任が大学にはある。この考え方を突き詰めると、佐藤の指摘するように、学生に授業評価をさせるのは、刑務所の囚人に刑務所の臭い飯がうまいかどうか尋ねるようなもので、実にナンセンス、嘔飯ものだということになる。

よくある批判として、授業に出てこない学生までもが授業評価するのが教師の不信感を招くというものがある。いくつかの大学では出席の度合いに応じて評価が割れるかどうかを統計的に検討しているが、多くの大学で差がみられない。この結果を受けて「だから授業評価は信用できる」と言われているが、本当にそうなのであろうか。「だから信用できない」とも言えるのではないか？

私は授業評価というネーミングがまづいと考える。つまり、学生による授業評価はわれわれが考える「評価」たり得ない。評価とは何か物差しがあって、その物差しに照らし合わせて対象を計るということであり、ただ単なる直感に基づく印象ではない。しかも匿名で「評価」が行われるため、あることないこと無責任に垂れ流しにしたようなもので「」評価」の名で行われるのは、確かに理不尽であるとも言える。これでは評価ではなく評判にすぎない。かつて文豪志賀直哉が文芸批評不要論を唱えたことがある。文芸批評というものは、単なる主観的な印象批評であり、批評たり得ないというわけである。これと同じことが学生の授業評価にも言えるのではないか？

言い換えれば「公的」であるべき評価に「私的」な感情を持ち込む学生は排除できないということである。厳しく叱責されて怨みに思っているとか、何となくむかつくとか、根拠薄弱な学生の印象が、無修正で「公的」な評価として大学で認知されるというのは、どう考えても無理があり、「出席していない学生が評価に加わる」とかいったレベルの問題ではなく、もっと大きな評価の信頼性に関わる問題であると考えられる。

もちろん、私はこの「授業評価」が不要といっているわけではなく、貴重な学生の声であることは認める。ただ、それが無修正・無加工でそのまま当該教員や当該大学の「教育評価」であるというのは全くおかしい。主観的な印象論も含んだ学生の声を加工して「教育評価」に練り上げ、教員の意識改革や大学改革につなげていくという、この加工のプロセスが必要である。それなしに、ただ単なる集計結果を教員に渡して「これがあなたの評価です」というだけでは、あるいはそれを研究費や給料の増減にダイレクトに結びつけるのは乱暴ではないか。それはあたかも、茶碗一杯のご飯を供するとき研ぎもせず炊きもせず、袋から出した米粒を茶碗に盛って「これを食べなさい」というが如きものである。

この授業評価を教育評価に結びつけ、授業改善やFDにつなげていくプロセスは実は大学によって大きく異なる。つまり授業評価なり、教育評価を何のために行うのかという目的に関わるのであり、何を目的にして何を尋ねるかということが、それをどのように加工してどのように改革に生かしていくのかに深く関連している。

例えば、現在行われている評価はいわゆる事後評価、総括的評価である。評価には事前評価、形成的評価、事後評価とある。事前評価は学生の学力の水準やばらつきを予め診断して、授業内容をさだめるために使われる。総括的評価は、全授業終了後に全体を通してどうだったかを尋ねるものであり、多くは他の教員と比較可

能な数量化された形で結果が提示される。

これとは別に形成的評価がある。形成的評価とは毎授業終了後、あるいは何回かおきに学生にあるフォーマットで、あるいは完全な自由記述で授業への要望、質問、意見、批判を書かせるものである。この形成的評価を有効に使って学生との双方向型授業を構築し、また学生の声を次の授業から早速反映させることにもつながる。また、万一自分に不利な総括的評価が出た場合に、「いや、私は普段ちゃんと授業をしてきたし、減額制からこういうレスポンスが帰ってきている」というアリバイにもなる。

ただ、形成的評価はパーソナルなものであり総括的評価のように教育システム全体の評価を含むものではないし、そのような目的に使うのは無理であろう。だからこそこの両方の評価を有効に使っていくことが必要なのである。今広く行われている「学生による授業評価」という名の総括的評価は、数ある授業評価の中でもある特定の一つの種類に過ぎない。それだけを絶対視して、評判のいい先生と評判の悪い先生に種わけして、賞罰を加えるというのではなく、まず第一に学生による授業評価をもっと多角的に展開する必要がある。

そもそもアメリカでは厳格な成績評価が行われる一方で、授業評価が教育能力の測定と教育改善に有効に生かされているというのは、偏った見方であり、私の知る範囲では少なからぬ大学では成績評価も授業評価もA B C D四段階でAとBに偏る。つまりできの悪い学生と評判の悪い教員をあぶり出すということ以上の機能を持たない例も少なくない。そしてそれが当たり前であり、授業評価の持つ意味を過大に評価しすぎるのもいかがかと思う。総括的評価の果たす役割とは、しょせんその程度のものである。日本ではこれまでほとんど授業評価が行われてこず、導入されるや否や「お客様の声」として過大な扱いを受けるというバランスの悪いことになっているわけであり、混乱が見られるように考えられる。したがって筆者の考えでは（総括的評価のみの）授業評価の結果を持って教員の勤務評定を行うなどということは、何も益をもたらさないどころか有害でしかないということになる。

何よりも、学生は単なる大学教育の消費者ではない。大学と学生の関係は単なる企業と顧客の関係のアナロジーではない。なるほど学生は大学教育を受けるわけでありそのクライアントである。しかし、その学生達を雇用し受け容れていく実社会、企業、官公庁も大学教育のクライアントであり、この面では学生の大学のプロダクツである。したがって、先述のIRセンターはこういった大学教育のクライアントたちの声を広くすくい上げていく機関として、またその声を「加工」して改革につなげていく機関として期待されるわけである。学生の声だけを絶対視するのではなく、他のクライアントたちの声をもくみ取っていく。もちろん、学生の声からくみ上げるべきはくみ上げていくという姿勢が求められていると考えられる。「学生の声」をあくまで素材の一つとして、個々の大学の建学の精神や学風に応じて加工して教育評価につなげていく。これこそが望ましい教員像なり大学像につながっていくのではないだろうか。

V. 「神戸大学の将来に望むこと」から見えるもの

平成15年度後期に教養原論「伝統と社会変動」の一コマとして「神戸大学の歴史・現状・将来」と称する講義が展開された。野上学長以下、各部局長を中心に各学部の教育研究の歴史と現状の紹介、将来の展望が述べられた。

第1回 野上智行学長

第2回 岩崎信彦文学部長

第3回 須藤健一国際文学部長

第4回 船寄俊雄発達科学部教授

- 第5回 瀧澤栄治法学研究科長
- 第6回 福田亘経済研究科長
- 第7回 中野常男経営学研究科長
- 第8回 松田吉弘理学部教授
- 第9回 三木明德医学部保健学科長
- 第10回 守殿貞夫医学部医学科教授
- 第11回 森脇俊道工学部長
- 第12回 眞山滋志農学部長

先述のように大学が学問の場から生活の場、自分探しの場、人間形成の場へと変化していくのならば、学問への愛着を育てるだけではなく、大学という場それ自身（所属学部以外の学部・学生）への理解と愛着をも育てる必要がある。筆者の解するところ、この授業は、その理解と愛着を育む大きなきっかけを多くの学生に与えたようである。

このような授業を通じて、初めて神戸大学とは何か考えたとか、歴史について何も知らなかったが初めて長い伝統と歴史の上に自分がいることに気づいたとか、神戸大学の他学部で何を研究教育しているのか少し分かったし、興味がわいたという回答が多く、このような授業を選択ではなく、全学の必修科目化する方がいいという声が多く見られた。

つまり、言い換えれば神戸大学という「生活の場」「自分探しの場」「人間形成の場」としての豊かさ、可能性をこの授業を通じて確認したということであると思う。教員の研究教育の幅、様々な学生・院生（当然、留学生を含む）がいること、そういった神戸大学という一つの場に集う人材の多様性と豊かさを知るきっかけになったということであり、これがまた、場としての大学への愛着を育むことにつながるのである。

実のところ、筆者は講義スタート時に大きな懸念を持っていた。学長・部局長は大変お忙しい方々だから、当然授業内容について綿密に打ち合わせする時間はとれない。その結果、スタイルも内容もてんでバラバラな授業になるのではないかと、せつかくの企画が無駄になるのではないかとという懸念である。実際に12回の授業を通して受けてみると、予想通り「てんでバラバラ」であった。

しかし、学生の反応を見るとそこがよかったようである。瀧澤先生のように板書もせず、資料も配らず穏やかな語りのみで授業を進められる方もいれば、森脇先生のようにパワーポイントを巧みに駆使してご自身の先端的な研究内容について話される方など、さまざまにそのスタイルや内容の多様さが、神戸大学というコミュニティの多様さ、資源の豊かさを学生に実感させることにつながったようである。

たとえば、経済学部2年男子の次のような声が印象に残っている。

僕がこの講義を選択した理由の一つは、神戸大学が旧帝大とも肩を並べるほどの多くの学生・学部を抱えながら、その中にいる自分は、神戸大学のことや他の学部・学生を知る機会が非常に少なく、一方で、多種多様な人材が一カ所に集まるという恵まれた環境の中でありながら、自分とは異なる分野の人がどんなことを学び、研究しているのかということについて興味・関心を持たないことはとてももったいないという気持ちがあったからです。僕らにとってなじみの薄い海事科学部についての講義がなかったのは残念ですが、12回の講義を通じ、学長を始め、各学部長の話聞く中で、それぞれの学部の成り立ちや戦後タコ足大学と呼ばれていた当時の学部間の隔たりやその後の一つの大学としての紆余曲折、また神戸大学の姿・他学部の活動内容の概略が徐々にわかってきたように感じます。

学生が全く知らないこと、としては、まず野上学長が語られた大学の略史、神戸大学の略史について、そもそもよく知らないものが多く、驚きがあったのと、神戸大学の教育理念・特徴について、自学部以外のことはほとんど知らないということかなりの学生が認識させられたようである。学長が自ら教壇に立たれた意味は大変大きく、学長自らが「神戸大学のことを誇らしげに宝物のように語られる姿に感動した」という声が少なからずあった。「教養原論は大事です。教育は大事です。本学は学生中心の大学です」と、われわれヒラ教員が口を酸っぱくして繰り返すよりも、学長が一度壇上にたたれる方が学生にとってはよほど効果的であることがよくわかった。

もちろん、そうした情動面の効果だけではなく、全くこれまで知らなかった、そしてこの授業を受けなければ知らないまま卒業していたであろうことが、大半の学生にとってはあり、大きな収穫と移ったようである。

まず文系学部について。ある学生（法学部2回生男子）によれば、文系の学部長は伝統と歴史を強調する傾向があるとのことであったが、筆者もそう思った。

文学部の岩崎教授は、「文学部は文学だけをやるところではない」という言葉から始まり、文学部の歴史を概説され、新制大学発足時の小松事件や1960年代の学生運動について語られた。これらは現代の学生には歴史的事実であり、小松事件などはほとんどの学生が聞いたことすらないようであった。かりに、単語としては聞いたことがあっても実際どのようなものか知らないというものも多かった。

国際文化学部の須藤教授は国際文化学部の多文化共生の理念を語られたが、これは一学部の理念でなく、神戸大学全体の理念であるべきだという声が多かった。この言葉は将来国際的な舞台で活躍したいと考える学生たちに大きな刺激を与えたようだ。

発達科学部の船寄教授は、日本教育史がご専門だけあって、神戸大学を含む戦前からの高等教育の歴史を巧みに概説された（もちろん、本学教育学部・発達科学部に力点を置いて）。これも学生の全く知らないところであり、旧制の神戸商大の歴史については、六甲台三学部の学生であるから知っているものもいたが、他の学部の歴史についてはほとんど知るところがなく、驚きの声が多くみられた。また船寄教授の「どんなに大衆化したとはいっても、大学は知的コミュニティであり、そうあり続けるべきで、知に関心のない人はくるべきところではない」という言葉は、納得している学生が多かったように見受けられる。

法学部の瀧澤教授の回では、学生たちも概略知っていたものの、あらためて法学部教員の国際的・国内的な研究評価の高さに感銘を受け、また瀧澤教授が熱く語られた法科大学院への期待を寄せるものが多かった。

経済学部の福田教授の場合にもCOEなど国内外での研究評価の高い教員の質に改めて認識を深くし、自分の所属大学や学部への誇りを新たにしたものも多くいたようである。

経営学部の中野教授は旧制の神戸高商以来の三学部の歴史を語られた。経営学部の学生でも、自学部の歴史については、ほとんど知らず、三商大とか三商戦の由来を知り、納得したという学生が多かった。また、経営学・会計学では神戸大学は日本の大学をリードする立場にいるのだという中野先生の説明が多くの学生に感銘を与えたようである。特に経営学部の場合、企業のトップリーダーを呼んで講義を行うなど、実社会とのつながりを強調されたが、経営学部の学生を中心に賛同の声が大きかった。

ついで、理系学部について。先の学生によれば理系の学部長は文系の学部長とは違い、いかに企業や地域と提携して収益を上げているかを強調する傾向にあるということである。

理学部の松田教授は理学部の多様な学科・研究室とその教育・研究活動について、非常にコンパクトに要点を押さえて説明された。理学部については全く接点がなく知らないという学生が大半であり、新鮮であったようだ。

医学部保健学科の三木教授は軽妙な語り口で保健学科の歴史と「酒と健康」といったテーマについて話され、酒の上手なのみ方について語られた。学生からは非常に役に立つ実践的な講義であるとの評価が多かった。

医学科の守殿教授は医学科・病院の多様な研究活動について語られると同時に、震災で受けたダメージからどのように立ち直ったかというここ10年の取り組みについて話され、またAIDS問題について学生に実践的な講義をされ、三木教授の時と同様、非常にためになるという声が多かった。また体のことには多くの学生が興味を持っているのであるが、病院や医学部の組織がどのようになっているのかについては、ほとんど知識のない学生が多く、新鮮であったようだ。

工学部の森脇教授は、これまでの先生方とは異なり、ハイ・テクノロジーの世界を学生の前で示され、スライドを通じて示されたミクロの世界に学生が熱心に聞き入っていた。多額の研究資金を獲得していることが披露されたとき驚きの声が漏れていた。

農学部の実山教授は、農学部各学科の教育研究活動について概説されたが、神戸大学牛（神戸牛ではない）ブランドの生産・販売などは、学生も全く知らず、大きな驚きと感銘を与えたようだ。

ただ、この授業の趣旨と目的自体は大いに達成されたものの、最終のレポートの中で学生から出てきた要望も少なからずある。それらは三つに分類される。

(1)教育システム・授業改善

教養原論を中心に授業がつまらないという声は相変わらず多い。また空調を含む教室設備の悪さを指摘する声も予想通り多かった。学生の少なからぬ部分が私立学校の出身者で、空調設備の整った環境で中学・高校と学習してきており、大学にきて初めて空調のない中で勉強することになったと不満を漏らすものも少なからずいる。この面での「高大の接続」を考える必要性を改めて感じた。また、授業内容であるが、もっと役に立つことを（たとえば、より多くインターンシップや実務家の講義をとり入れるなど、あるいは国家試験の対策授業など）取り入れてほしいの要望が多くあった。

これと絡んでキャップ制への不満が多くみられた。キャップ制には言及しているほとんどすべての学生が大きな不満を示している。本授業の対象が六甲台三学部のがくせいであるからであろうが、一二回生時に集中して単位を取って、三回生ではダブルスクールやインターンシップを通して就職準備をして、四回生は就職活動という青写真が崩されたという不満が大きいようである。また後で述べることも関連するが、課外活動への支障も何人かの学生が訴えていた。

とにかく、高い授業料を払っているのに、登録できる単位数を制限されることには、多くの学生が不満を覚えている。もちろん、キャップ制の本来の趣旨を学生のほとんどが全く理解しておらず、またキャップ制本来の趣旨に乗っ取ったカリキュラムを本学が提供していないことが問題の根本にある。

また、少人数ゼミを一年時からやってくれという声が多かった。多人数の一方的講義ばかりでは、学生のやる気を盛り上げるどころか低下させるばかりであり、いくら授業評価や授業改善を歌って教員が一生懸命にやっても、何の効果も生み出さないというわけである。

さらに開講してほしい科目としては「神戸学・食・ファッション・スポーツ」など日本の文化の発信地としての神戸について、講義があってもいいのではないかという声が見られた。

(2)就職活動・課外活動

冒頭で「学生から生徒へ」、「学問の場から生活の場、人間形成の場へ」といったが、授業のみをよくすれば大学がよくなるわけではなく、授業以外の活動、就職を含むキャリア・プラン、課外活動にも支援を求める声が多い。特にサークルではなくクラブ活動、文化系ではなく体育系のクラブ活動に従事する学生からの要望

が大きい。前述したようにクラブに加入するものは漸減しており、大学からの財政的な支援も徐々に細ってきていると学生の多くは感じている。さらにキャップ制の導入で、中心になるはずの二、三回生が授業出席のため不在になり、クラブ活動が滞るとの声もあった（グリークラブ部長）。課外活動は、これからのユニバーサル化する大学の大きな課題の一つであろう。5限授業が増えると、課外活動離れがいつそう進むであろう。

経済学部四年生が述べていたが、神大の公式HPに課外活動のページを作ってはどうかとか、少なくともリンクを張ってはどうかという声があった。

もう一つ、就職活動であるが、上述のようにインターンシップやダブルスクールを通じて在学中から職業経験・訓練を積む学生の多くが個人的なレベルでやっており、大学として組織だった支援がもっとできないかという声が多くみられる。

またお茶の水女子大や広島大でみられるように、学生の心理的なケアをする部門をもっと強化してほしいという要望も寄せられている。就職活動も1回生から、ガイダンスだけではなく、様々な先輩や社会で活躍する人の話を聞く機会を設けて職業意識を高め、またそれを大学がサポートしてほしいという声も寄せられている（経営学部2回生女子）

また、OB・OGのネットワーク化など、大学がもう少し力を入れて支援してほしいという声も大きい。

(3)地域活動・ボランティア活動・国際交流活動

学生の中にはボランティアなど地域活動、地域との交流を望んでいるものも多く、それを大学が支援することを望んでいる。本学の学生の多くは兵庫県・大阪府を中心とする近畿圏出身者であり、大学を通じて地域貢献したいという気持ちは他大学よりも強いのかもかもしれない。以前、大阪教育大学の学長補佐を務める米川英樹（教育社会学）教授と出版社の企画で対談した折り、「最近の学生は目的意識がない、と嘆かれているが、大阪教育大ではこの10年間で2回、学生がまとまって大きな活動のうねりを作った。一つは阪神・淡路大震災であり、もう一つは附属小の殺傷事件後のPTSD問題である。このときに多くの学生がボランティアを買って出て非常に熱心に活動して大学を、地域を、被害者や被災者を懸命に支援した助けた。こういう大小のきっかけを継続的に作り出し、学生たちが打ち込めるものを（授業や課外活動だけではなく）提供していくのが、人間形成の場としての大学に求められているのではないか。」という見解を米川教授が述べられたのが深く印象に残っている。（【註】この対談については、山内乾史・原清治『学力論争とはなんだったのか』（ミネルヴァ書房、2005年1月刊）に収録されている。）

こういった授業、課外活動・就職活動、地域活動といった様々なフェーズで学生が打ち込める対象を見だし、自分探しを行い、将来の進路を考え見いだしていく支援をする。これが本学に限らず大学には求められているのではないのか。要するに地域活動やボランティア活動、国際交流活動などの内包する教育的価値を大学が積極的に認め、それを活用し、オーガナイズして学生に提供するということである。正規のカリキュラムだけをレベルアップするというのではないということである。

VI. 結論—大学改革のハイエナ・モデル—

神戸大学の歴史に関する教養原論は、教授されている先生方（と参観していた筆者）が予想していた以上のインパクト学生に与えたようだ。神戸大学には多種多様な教員と人材がいること、多様な研究活動、課外活動が展開されていること、研究面で著名な教員が多数いること、地域社会に様々な関わり貢献していること……。こういった知識を各方面から一つの授業内で教えることは、近年よく指摘される「自分探しの場」としての大学ということにつながる。自分は何者か、なぜ神戸大学にいるのか、今在籍している神戸大学とは

どのような場で自分に何を与えてくれそうであるのか。こういった問題を暗に考えさせるわけである。他学部についての紹介でもほとんどの学生が熱心に聞き入り、いささか大仰に言えば、「他者（もちろん、全くの他者ではなく同じコミュニティの成員であるが）理解を通じた自己理解」をはかっていたということにもなるわけである。

この上、何か求めるべきものがあるとするれば、〈自分探し〉につながるだけでなく、〈自分さらし〉の場をもつくる一つまたは少人数ゼミの充実や課外活動の充実—ということになるだろう。お互いをさらけ出しあって、自己理解、相互理解を深めあっていくということである。

今回のこの授業を通して参観する機会を与えられて、望ましい教養原論のあり方について、考えることにつながった。スキルアップも大事であるが、その前提条件として、自らの属する大学や部局、専攻する学問、そして学生・院生への愛情・愛着を、学生に伝えていくことのほうが、本学の学生の場合には重要であるということである。こういったものを伝えていくことも教養原論を担当する教員の大きな使命ではないだろうか。

授業評価をどう利用していくかということについて、付言しておく、すでに述べたように「第三者評価」だの「外部評価」だの「自己評価」といった一連の「評価」と授業評価とは「評価」の含意が違う。授業「評価」によくみられる私的な信奉や怨嗟の言葉を、公的な言葉に練り直す努力が必要なのだ。近年、筆者の見聞する範囲では、徐々に授業「評価」を勤務評定として使う大学が増えてきているようである。多くのケースでは常勤教員については「反省材料」として、非常勤教員については「勤務評定」として使うということのようである。授業「評価」は「顧客のニーズに基づく、競争原理に基づく教員評価である」という声さえ聞こえる。しかし、すでに述べたようにアメリカ合衆国その他の国々で行われている授業評価を神聖視し、過度に理想化する傾向は危険きわまりない。アメリカ合衆国、イギリスの大学改革を参考にするのは良いのだが、いくつかの大学が、何か一つ新しい（新しそうにみえる）改革のネタがあると、日本的風土への適合性など検討することなく、それをすぐに導入して（しかもノイズを伴った形で導入して）「改革の優等生」ぶろうとする姿には疑問を感じる。

もちろん、こういった背景には、改革の中身が何であれ、とにかく改革しているというポーズをとり続けたいとお金や志願者がついてこないという状況がある。極端な話、実質的に改革がどういう成果を上げたかはどうでもよく、予算確保、志願者確保のために「永久改革」に向かってすべての大学が走り続け、様々なポーズをとり続けているのだ。本省が推奨する改革が「A」だということになると、多くの大学がそちらへ走る。確かに、そちらへ走った大学には予算措置もある。本省も改革に熱心な大学だと評価し、志願者も増えるのだろう。しかし一定の数の大学に「A」という改革が行き渡ると、「A」という改革をただけでは予算措置もできなくなる。そこで次は「B」という旗を掲げて新たな「改革」に走ることになるのだ。

このように本省が予算措置をする「改革」なるものに全国の大学がわーっと群がり、別の旗を本省が挙げれば、またそちらへわーっと群がる。この節操のない「改革」はまさにハイエナ・モデルというにふさわしい。授業「評価」もそういうものの一つだったのではないのか？実質的に機能させようという意志は、実のところ本省にも大学に薄弱で、ただ本省は財務省に、各大学は本省に対して「改革をしています」というポーズを示すべく、授業「評価」が「評価」の名の下に蔓延しているのではないのか？もう少し冷静にこれを機能させるべく考え直す時期に来ているのではないのだろうか？

附註：本稿は原清治氏との共著書『学力論争とはなんだったのか』ミネルヴァ書房刊に収載されている拙稿に大幅に加筆したものである。

The purpose of this paper is to examine what can we do for developing and Improving the university education with student evaluation.

Kenshi YAMANOUCHI(Associate Professor, R.I.H.E. Kobe University)

The conclusion will be summerized as follows:

1. Student evaluation in popular is not "evaluation" in the real meaning. That is Evaluation should be made in public words and be with clear standard and high objectivity. But ones frequently used in Japan now adays are just only private opinion or less.

2. So we should utilise this as one of the opinion by cliants of university education. Cliants of university education includes cooporarion, graduates and foreign students. Undergraduates are important but just only one of these cliants.

We need the deliberate procedure to make these "evaliuations" to a real evaluation and without this procedure student "evaluation" will be harmful.